

豊臣勢力が本格的に改修を行った事例（松山城）の縄張りを検討する。前者は、文書資料を駆使して「戦局の推移のなかに城郭構造を落とし込んでいく」ことにより、動きのある歴史を浮かび上がらせることに成功した。後者は、現状で一部破壊されている松山城（苅田町）を、米軍撮影の航空写真などから復元した縄張りを考察するなかで、在地勢力段階、九州平定戦段階、黒田氏豊前入部段階あるいはその後の細川氏段階の三段階にわたる普請が行われたことを明らかにした。織豊系城郭が浸透する様子を具体的に示した論考であり、他の城郭理解にも参考になる。

第3節「豊前国人一揆をめぐる城郭」は、豊前南部六郡に入部した黒田氏と在地との軋轢が城郭構造にどのように現れたのかを探るものである。高石垣を持つ明確な織豊系城郭は北部九州では中津城（これも一部の石垣以外は黒田期の縄張りとは未確定）だけであるが、細かなパーツの使い方（槽台状の張出しや塁線の折れなど）から黒田方の改修の実態に迫る。在地の中世城館の上に刻まれた織豊系の技術が徐々に明確になってきたといえる。

終章は「城館が描く北部九州戦国史の構築に向けて」というタイトル通り、著者のこれまでの取り組みをたどり、そして「道半ばで」ある「北部九州戦国史の解明」への決意表明がなされている。著者は、近年山岳寺院の調査にも「縄張り調査」の手法や3Dオルソ画像を導入して実績をあげている。今後新しい研究方法を取り入れながら、行政エリアの枠を超えて九州における戦国期の社会構造解明に取り組むことを期待したい。

（こやなぎ・かずひろ 別府大学非常勤講師）
（B5判、二六〇ページ、二二二〇〇円、吉川弘文館、二〇二〇・一〇刊）

大桑 齊編著

『本願寺教如教団形成史論』

松金直美

本書は、編著者・大桑齊の原著『教如東本願寺への道』（法蔵館、二〇一三年）で、教如の生涯を概観し、教如の生き様を描き

出すことが試みられたうえで、残された課題に取り組むために執筆された。その課題とは①教如による教団形成の具体相の解明、②教団形成を基礎づける教如の宗教的理念の究明、である。

編著者は五十年前、真宗教団史研究から研究をはじめが、勤務先・大谷大学での所属変更（日本仏教史学→国史学）も関わって、思想史学に転向する。それが二〇一三年の教如四百回忌へ向けて教如研究を進めるにあたり、真宗教団史へと回帰した。本願寺教如の教団形成という主題と、その前提となる真宗教団史と教如の救済論（思想史）によって、これまでの研究の軌跡が結ばれる。

では本書の内容を紹介していく。本論三章と、参考論文の付論三本、資料編で構成されている。

「第一章 教如教団の形成―下付御影の検討から―」では、教如による教団形成が、歴代宗主に見られない大量の御影下付を特色としており、その意味の解明を課題としている。

これまで御影の下付先は寺院とされてきた。ただし教如期には、御影を安置しなが

ら道場として存続した場合も多かった。

また広域連合体である庄・郷の惣道場に宛てられた御影もある。下付された御影は回り持ちされたとみられる。尾張・美濃・湖北に坊主・門徒の地域連合組織が展開し、これが教如の活動を支えた。つまり「惣道場」は特定堂舎の有無に関わりなく、広域的に門徒・坊主が結合した信仰集団を表象する概念であった。

一方で教如は、懇志を上納した門徒衆へ多数の受取札状を発給している。その宛所の分析から、寺坊とは別個に、懇志を上納する門徒衆結合があったことが分かる。

つまり教如教団の構成員には、寺坊と門徒衆がおのおの別個に併存していた。それが近世教団では寺坊とそれに所属する門徒という、寺単位のみを構成要素とするようになったとする。

第二章 教如教団形成における戦乱と開拓―越後蒲原平野での教団形成―では、信州から移住した真宗門徒によって蒲原平野が開拓され、その人びとが教如に結集して御影類を下付された要因を検討している。

そこで着目しているのが講組織である。

教如教団では、寺坊と並んで門徒衆の結合体として講が重要な位置を占め、それらが連合を結んで広域講を形成していた。こうした門徒衆結合を可能にしたのは御同行御同朋精神の共同性であった。このような門徒衆が荒地開拓を成し遂げて、講を結び懇志を上納して教如教団に参加した。

第三章 本願寺教如の救済論―消息・証判御文・掛幅の思想的検討―では、①消息の信心文言を分類検討し、②証判御文の五帖目型に付加された御文の使用回数問題を論じ、③聖教抜書掛幅から文言選択の意味を考えることから、教如の救済論に迫っている。これまで、教如には著作がなかったため、教如が課題とされてこなかったことに対する方法の提示である。その際、①教如の動向把握、②思想的課題、③両者をあわせた分析方法が用いられている。冒頭で示した、本書を執筆する課題に結びつくと言えよう。

「付論1 東西分派論序説―天正末―文禄期における教団変革の視角から―」では、東西分派を、教団頂点の内紛としてではなく、本末組織からなる教団そのものの分裂としてみていく。東西分派前の本願寺

教団が「一家衆寺院―在有力寺院―一般寺院」という本末組織だったところ、土着の在有力寺院の多くは、一家衆寺院との与力関係（きわめて政治的）から独立する過程において、教如と結合していった。このような教如方は北国・東国に展開し、一方の頭如方は、一家衆寺院を通じて農民の一般寺院を支配していき、西国を基盤とした。

「付論2 真宗寺院成立史試論」では、従来、寺号と木像本尊を備えることが寺院の要件とされてきたことに対し、本尊を安置する場を寺院と捉える。その本尊には、仏菩薩の応化身としての親鸞影像と、如来の本体としての名号も含まれ、本願寺という「真宗寺院」は、親鸞影像と十字名号という二本尊を安置して成立した。

それは一般の寺院や道場も同様である。寺号の有無にかかわらず、十字名号・親鸞影像が下付されることで、「真宗寺院」として成立した。文明期（一四六七―八七）以降、十字名号はまれにしか発給されなくなり、やがて親鸞影像が「真宗寺院」の出发点となる。

つまり「真宗寺院」となるということは、

寺号でも木像安置でもなく、親鸞影像の安置こそが要件であるとする。親鸞影像の下付によって、大谷影堂に淵源する親鸞影像安置の場として、既存の寺院や道場が「真宗寺院」に生まれ変わった。

「付論3 教如九州下向史料の検討―関白政権と本願寺―」では、天正十五年（一五八七）に関白豊臣秀吉が薩摩の島津征伐として九州に出陣した際、本願寺教如が見舞のために九州へ下向したことを取り上げる。

従来の研究では、豊臣政権と本願寺の關係は親密だったため、と説明されてきた。それに対して、朝廷の一翼たる門跡・本願寺は、朝廷権威である関白政権の一員として、関白が九州討伐という軍事行動に出動すれば、宗教的権威として支援を求められた、と説明する。

だが文禄二年（一五九三）閏九月、本願寺を継承した教如を、秀吉は追放した。新門跡教如を、本願寺にふさわしいとは考えられていなかったのである。ここから本願寺の分立、教如による新教団形成が始まる。

最後に、資料編纂者・川端泰幸による「教如上人消息一覽（修正版）」が掲載され

ている。第一章末尾にある「教如下付御影一覽」とともに、今後の教如研究において、基礎資料としての活用が期待される。

「あとがき」で編纂者は、本書を次のような視点で読んで欲しいと述べている。教如は、御影類を大量に下付することで、新たに多くの真宗寺院を生み出し、教団を組織した。教如もそのもとに結集した門徒・坊主も変革者であり、その人々によって教団構造は変革された。それは社会的変革にもつながり、教団を大地に根付かせる変革であったと見るべきだろう。

本書では、教如教団の特徴を①坊主・門徒による地域連合組織や門徒の講組織に見ている。それがしだいに②寺院単位に門徒を組織したもの、となったのが近世教団であるとし、教如的変革とは別の方向に変質させられたとする。

はたしてそうであろうか。近世になり、寺坊と門徒衆の結びついた寺権関係が強固となつてからも、①に基づく講組織は継承されてきた。共有する法宝物のもとに集う法要が、連綿と現代まで続いてきた地域も各地にある。

①②を併存させたのが近世教団であり、

現代に至るまでの真宗教団の特徴ではなからうか。そのような意味で、教如教団はそれ以降の基盤を形成したと考えられる。

本書を手にしたのは編纂者・大桑の計報に接して間もない頃であった。「あとがき」で「おそらく、研究生活の最後になるであろうこの編纂」と自身も記すように、研究の集大成として最後の著作物は残された。本書を通して感じた問いに対する編纂者からの返答は望めない。多大なる学恩に報いるためにも、評者自身の研究として、応答し続けていきたい。

（まつかね・なおみ 真宗大谷派教学研究所研究員）

（A5判、三八〇ページ、七七〇〇円、法藏館、二〇二〇・六月）

課題・展望を述べ、竹山以後明治維新に至る政治状況と知識人の動向を展望している。

以上、本書の概要を紹介してきたが、合わせて指摘した課題などもふまえ、今後、著者をはじめとする若手研究者により、近世後期知識人研究が一層展開されることを期待したい。

(うめざわ・ひでお 清泉女子大学名誉教授)
(A5判、五二八ページ、一〇二二〇円、東京
大学出版会、二〇二〇・七刊)

石原 和著

「ぞめき」の時空間と如来教

近世後期の救済論的転回

神田 秀雄

本書は、著者が二〇一七年に博士号を取得した学位論文をもとに、その後の学会発表の成果なども付加しつつ改編した書物で、目次の概要は次のとおりである。

第一部 一八〇〇年前後の救済課題と如来教

第一章 一八〇〇年前後における救済の動揺—三業惑乱と如来教—

第二章 名古屋城下の真宗異安心と如来教—尾州五人男をめぐる—

第三章 「渴仰の貴賤」と如来教—作善実践に向き合う—

第二部 一八〇〇年前後名古屋の宗教環境と如来教世界の形成

第一章 如来教世界の形成過程と秋葉信仰

第二章 如来教説教の想像力としての近世観覧伝

第三章 文政地震と如来教

結 章 本書の成果と課題・展望

本書の各章を一貫する分析対象は、民衆宗教のなかでは開教がもつとも古いとされる如来教(一八〇二年、現在の名古屋市熱田区で元武家奉公人の女性喜之(一七五六—一八二六)が創唱)である。しかし著者は、従来の同教研究は宗派研究的な枠組みで進められてきたとし、一九九〇年代以降、民衆宗教研究一般も新たな学界動向を撰取できずに停滞しているとして、そうし

た状況の抜本的な打破を目標に掲げている。また同時に、近代国家の成立・展開と関連づけて民衆宗教を論じるのではなく、あくまでも江戸後期における宗教事象の多様な展開のなかに如来教の誕生・展開を位置づけたい、との意図をくりかえし強調している。

合計約二五〇篇にもなる如来教の教典「お経様」(神田秀雄・浅野美和子編「如来教・一尊教団関係史料集成」全四巻(清文堂、二〇〇三—〇九年)として既刊)は、名古屋一帯の住民が教祖にどのような願いを寄せ、神憑りした教祖はそれらにどのような応えたのかを伝える説教記録である。だが同時に、信者らの家の宗旨である浄土真宗や日蓮宗、浄土宗、曹洞宗などの各宗祖の伝記や故事のほか、信者らが関わっていた多様な神仏など(流行神祇のものを含む)への言及を豊富に含んでいることから、個別教団の教典を超える歴史的意義を有する史料だとも言える。そのため、村上重良・安丸良夫編「民衆宗教の思想」(岩波書店、一九七一年)の刊行以降に本格化した如来教研究では、元奉公人の教祖にそうした広範な言及はなぜ可能だったのかの

説明が、重要課題であり続けてきた。本書は、「一八〇〇年前後」の「都市名古屋という空間」で人々が負うようになった宗教史的課題とはどのようなものだったのか、当時の人々はその課題とどのように向き合ったのか、という問いに変換しつつ、右の重要課題を引き継いでいる。そのうえで、隣接領域の研究者にも広くアピールできる斬新な解答を描いて見せた書物である点が、何より評価されるべきだろう。

第一部の主要論点は、江戸期における真宗門徒の動向と如来教の誕生を関連づけて捉えた、およそ次のようなものである。すなわち、江戸期の真宗教学は、初期の唯心論的教學から一八世紀には「助けたまえたのむ」運如教學へ移行し、やがて全身全霊をあげてたのむことを重視する教学「三業帰命説」が展開して主流となった。しかし同世紀末には、運如教學のもう一つの側面である「ただ信心一つ」を重視する立場から批判が生まれ、教学上の大論争「三業惑乱」に発展していった。西派を起源とするそうした論争が宗派を超えて真宗内に広まった背景には、自らの生涯を努力次第で改善できる可能性が次第に高まる

時代状況(第三章はその実態を論証)のほかに、真宗の教化が末端では僧侶の旺盛な法話に支えられていたという事情もあった。そして一八〇六年(文化三)、幕府の裁定によって「三業帰命説」が退けられた後も、この論争は容易に収束しなかった。ほぼ同時期の名古屋周辺で生まれた如来教にも、実は何らかの修行によって救済を得ようとする人々が多く集まっていた。だが教祖は、願行は如来にのみ可能なわざだとし、「如来にすべてを任せなさい」「願行はつとめる必要はないから、人をいたわる心になりなさい」と説いた。つまり真宗の教学論争と如来教は、同時代の同じ宗教的課題の上に登場したものだ。

第二部では、既成仏教教団の外縁部に展開していた複数の宗教事象に、分析範囲が拡大されている。第一章で著者は、さまざまな霊場信仰が興隆したこの時代に、熱田や名古屋一帯では秋葉講の活動が急速な拡大を遂げたという事実に着目している。そして、如来教と秋葉講を同時に信仰する者もかなり現れる状況下で、如来教の教祖は、秋葉信仰の教説を否定するのではなく、むしろそれを取り込む形で自らの教説

を更新していった、という論旨を展開している。また第二章では、この時期の観覧伝が、実は如来教のような真宗の外部に相当する場でも語られることを介して創出されていったという、きわめて興味深い経緯を論証している。さらに第三章では、江戸期の人々が民間の伝承や「法華経」などに記された物語を媒介に地震を認識していた実態と関連づけつつ、地震をめぐる如来教教祖の発言の意義を論じている。

総じて本書の特長は、既存の研究とは次元を異にする広い視野のもとで如来教ないし民衆宗教を分析した点にあり、ことに近世仏教(真宗)と如来教との歴史的接点を明らかにした功績は大きい。しかし、如来教自体の分析には物足りなさを感じるとの意見もあり(二〇二〇年一月三〇日にZOOM開催された、立命館大学東アジア思想文化研究会主催の本書への書評会)、そうした指摘も一理あると思われる。

というのは、「救済」を思想的側面に限定せず、「多領域的活動」として捉える」と予告しながら、信者らの願望や信仰動機に立ち入ることには、著者がかなり禁欲的だからである。目前の死や重病への対処を教

祖に強く期待した人々がいた反面、平穩な日常を送ることができていた人々はむしろ如来教に距離を置いていたという実態にも、著者は言及していない。第二部第一章に見える、秋葉大権現の降下を求めた信者らの願望に沿って言えば、それは単なる鎮火・防火への期待だったのか、むしろ事実上の主神金毘羅大権現の圧倒的な活躍への反発だったのかなど、具体的な仮説を立てて論じるべきではないだろうか。

如来教の教祖は、在来の信仰を逐一否定して一神教的な神学の構築を目指してはいない。そのことは間違いないが、しかし、如来教を含む民衆宗教は、既存の神仏の世界全体を、人間の救済が意図されている世界として再解釈しようとしていたのであり、その限りでは「近代化」の要素をも併せ持っていた。実態に則して民衆宗教を理解するためには、そうした側面も安易に捨象しないことが重要なのではないか。なお、本書の書名に含まれている「ぞめき」の語（「開帳に代表される寺社の諸行事や民俗行事などに集う人々の精神的・信仰的高揚を指す）は、当時の名古屋の随筆家高力猿猴庵が多用した語句を借りたものだ

が、実は如来教には、祝祭的盛り上がりイメージはあまり馴染まない。もし猿猴庵と如来教に共通点があるとすれば、それはむしろ、神仏の世界に基本的な信頼を寄せていた点ではないだろうか。

（かんだ・ひでお 天理大学名誉教授）
（A5判、三七四ページ、四九五〇円、法蔵館、二〇二〇・七刊）

武田晴人・関口かをり著

『三菱財閥形成史』

杉山里枝

本書は、明治初期から第一次世界大戦期までの三菱財閥の事業経営の発展過程について、実証的に分析することを課題とするものである。共著者の武田晴人氏、関口かをり氏はともに一九九六年に開設された三菱経済研究所付属三菱史料館において兼務

研究員（武田氏）、専任研究員（関口氏）として研究に従事した経験をもつが、その際に史料館所蔵史料を用いて『三菱史料館

論集』に公表した論文が、本書の基礎となっている。修史事業、伝記編纂事業によって継承されてきた三菱関係史料に加え、岩崎家から新たに寄贈された史料群を利用することにより、従来の研究史とは異なる新たな研究の地平を開いた研究書であるといえる。

まず、各章の記述について簡単に説明することにしたい。第一章では、「奥帳場」に関わる史料を用いて、三菱合資会社成立前から日露戦争後にかけての時期の奥帳場の実態について分析している。ここで奥帳場とは、一八八〇年代前半に形成された岩崎家の資産勘定口のことを指すが、本章での分析をつうじ、奥帳場がその時々状況に応じて形を変えながら、岩崎家の資産形成の場として機能し、三菱の経営を実質的に支える役割を果たしたことを明らかにしている。

第二章では、明治一〇年代を中心に、郵便汽船三菱会社を含む岩崎家の事業全体がどのような経営組織の下にあったのかについて史料にもとづき分析をしている。そして、この時期の三菱の事業は海運事業を中心とするものの、それ以外のさまざまな事